**テーブル3** ファイア フレンドリー・ファ





50 あなた自身の世界を創造しなさい、それができなければ、あなたは無能だ. ----ウッディ

・・・ マザー

《テーブル3:フレンドリー・ファイア》は、イメ ージとサウンドが他のインスタレーションより強調さ れている. 騒々しく増幅された音声を発する中央の大 きな機械の周囲に、プロジェクション・スクリーンを 5枚吊るした《テーブル3:フレンドリー・ファイ ア》は、強度のセンサー刺激のための環境を設定して いる. 中央の機械は, 湾岸戦争から取られた友軍誤爆 の――アメリカ軍が、自軍の兵士を攻撃して死に追い やる――瞬間の映像を映写している.この戦争場面は レーザーディスクに記録され、 レーザーディスクはさ SICMIDI (MUSICAL INSTRUMENT DIGITAL INTERFACE)のドラムパッドと接続されていて、参 加者はパッドを叩くことにより、映像シークェンスの 動きを遅くしたり速くしたり、前後に飛ばしたりでき るようになっている、MIDIインターフェイスによって、 戦場の本能的な視聴覚体験は、3Dのヴィデオ・ゲー ムに近似したものとなる.

ヴァスルカの戦争機械と戦闘映像は、娯楽装置とし ておよび死の機械としての「戦争玩具」を思わすよう な文化的な連想を意味しているが、《テーブル3:フ レンドリー・ファイア》がセンサーに埋まっているた めに、テクノロジーのもつ娯楽という目的と、その破 壊可能性との境界は曖昧なものとなっている、こうし たコノテーションにもかかわらず、彼の機械はあらか じめ定められた指示に従うだけであり、隠された動機 であろうと直接的な動機であろうと、あらゆる動機に 役立つことになるかもしれない、機械一般についてヴ ァスルカはこのように言っている.「破壊するときも建 設するときも機械に忠誠心などない. それは破壊も建 設も、純粋にそのためだけに行なうのだ、倫理的な定 義は存在しない」、彼の機械の論理は(そして機械生産 の責を負う技術的厳密さは)ノマド的に機能する、特 殊文化的な妥当性を超え、娯楽と戦争についての人間 の特定の性向を超えて、操作可能性のオープン・フィ ールドを横断していくことにより、人間の心理を超越 するのだ. →p62

#### MATHER

Table 3: Friendly Fire emphasizes image and sound more than the other installations. With an array of five projection screens suspended around a large central machine that emits clamorous, amplified audio, Table 3 establishes an environment for intense sensory stimulation. A central machine projects found footage from the Gulf War that illustrates an instance of friendly fire-a deadly engagement of American forces with their own soldiers. This war footage is stored on laser disk, which, in turn, is linked to a MIDI (Musical Instrument Digital Interface) drum pad so that a participant's drumming on the pad makes the sequence of images move slowly or quickly, or even skip backward or forward. The MIDI interface allows for a visceral audio-visual experience of the battlefield akin to that of a 3-D video game.

Vasulka's military machinery and battle images refer to overlapping cultural associations with "war toys," both as devices for entertainment and as machines of death, while the sensory immersion of Table 3 blurs the boundaries between technology's entertainment objectives and its destructive potential. Regardless of these connotations, his machines simply follow prescribed instructions and may serve any ulterior or immediate motive. As Vasulka says of the machine in general, "There's no loyalty in the way it destroys or constructs, but it does both in a pure way. There is no ethical definition."3 His machine logics (and the technical rigors responsible for machinic production) function nomadically and transcend human psychology by traversing an open field of operational potential beyond specific cultural applications and beyond particular human propensities for entertainment and war.  $\rightarrow 63$ 

## ・・・ ドレーンズ

これが建築の力でないとしたら何であろうか. ある いはナチス・ドイツを考えてみよ. ブルーダーブント を考えてみよ、ニュルンベルクを考えてみよ、シュペ ーアの建築は権力を誇示するための容器であったが. 空間的出来事が、活性化が、運営が常に盛り返しに、 市民の操作につながっていた、建築は具体的なものと してよりも、観察とメッセージの振り付けとしてのほ うがはるかに重要だった、権力が把握されたのは、ラ ジオ、TV放送、映画作家リーフェンシュタールの才 能と並び、ヴァーチュアル建築を建造することにおい てであったのだ. 見る者の情動を反復可能にかきたて るための容器としての、 ヴァーチュアルな建築空間の 反復可能な振り付け、だが、もしヴァスルカの《テー ブル》連作がファシズムのアナロジーを発動するもの だとしても、その権力は、参加する個人に対して作品 が迫る二者択一のほうに、より堅固に根をおろしてい る、作品はユーザーに対し、個々人の「権力への意志」 を探究するよう誘うのだ. 《テーブル》連作はヴァー チュアルな、変化する建築を創出している、鑑賞者が 選択を行なえば、作品もまた鑑賞者に、作品から投影 される枠組みを与える――例えば、《テーブル6: ザ・メイドゥン》を擬人的に見ることは明らかな投影 である、とりわけ「彼女」が音楽によって動かされた ときには、そしてそのあいだずっと「鑑賞者」は鑑賞 されている――センサーによって、および覗き見して いる他の鑑賞者たちによって.

ヴァスルカは、1990年代の地下出版的連作とし て見られることになろう、美しいメカニズムの連作を 打ち建ててきた、生きるための(もしくはさらに言え ば、思考のための機械).のちに建築における最大の クリシェとなったもの――家は住むための機械である を作り出したとき、ル・コルビュジエは大真面目 だった、20世紀的生活と折り合うモードへと建築空 間を発展させるための、工業に基盤を置く美学を確立 しようとした彼の試みは、今世紀最大の貢献の一つで ある、この誇張的表現はわたしによる、これに類した ことをヴァスルカから聞いたり読んだりしたことは一 度もないが、空間的探究においてヴァスルカの仕事も 同じ役割を果たしているのではないかという推測は, あながち的外れではないとわたしは確信している、彼 の探究においてはル・コルビュジエの工業的探索に代 わり、エレクトロニクスのコントロール、デジタル・ パワー、そしてイメージのインフラストラクチャーへ の探索がなされているのだ.

ハイデッガー的含みを明確にもたせて機械を作り上 げることで、ヴァスルカは、大量の工業的な力と知的 な攻撃誘発性とを吹き込まれた両性具有的作品を創作 してきたのだが、これらの作品は、建築の一形態とし ても解釈されるものである、→p64

## DOLLENS

If this isn't architectural power I don't know what is. Alternatively, think of Nazi Germany. Think Bruderbund. Think Nuremburg. Speer's architecture was the shell for the demonstration of power, but the spatial event, animation, and charge was always intended to be the rallies, the manipulation of the *Publikum*. Choreography of observation and message was far more important as architecture than the concrete. It was in the construction of virtual architecture as radio waves, TV broadcast, and Reifensthal's cinematic genius that power was captured. The repeatable choreography of virtual architectural space as container for the repeatable stirring of viewer's emotions. Yet, if Vasulka's tables force the analogy of fascism, their



power more firmly lies in the binary choice they thrust to the engaged individual. They invite users to explore a personal "will to power." The tables create virtual, changing architectures. Should the viewer choose, they also provide armatures for viewers to project from the works—for example it is an obvious projection to see *The Maiden* as anthropomorphic, especially when "she" is musically engaged. And all the while the "viewer" is viewed—by sensors, by other voyeur viewers.

Vasulka has erected beautiful serial mechanisms that will come to be seen as seminal samizdat works of the 1990s. Machines for living (or, even better, thinking). When Le Corbusier coined what later became architecture's biggest cliché—a house is a machine for living—he was dead serious. His attempts at establishing an industrial-based aesthetic for evolving architectural space into a mode compatible with 20th-century life is one of the great contributions to this century. This hyperbole is mine. I've never heard or read anything like it from Vasulka, but I'm confident that I'm not totally off target with a speculation that Vasulka's work is taking on a similar role of spatial investigation, one where Le Corbusier's industrial search has been superseded by a search into electronic control, digital power, and the infrastructure of imagery.

In forging machines with explicit Heideggerian overtones, Vasulka has created hermaphroditic works imbued with massive industrial strength and an intellectual vulnerability that translate as one form of architecture.  $\rightarrow 65$ 







### ... フータモ/ヴァスルカ

#### それからこちらは?

《テーブル3:フレンドリー・ファイア》です.日 本やチェコスロヴァキアを含むさまざまな場所で何度 も展示されてきました、ある意味でこのテーブルは、 コンセプト的に《ザ・ブラザーフッド》に最も近いも のです、これはとても概念的な作品で、他のものと比 べれば内容さえもっていると言えます、いまではわた しは、内容がこのように作品の一部となりうるのだと いうことを受け入れています、しかし「内容」という のは危うい言葉で、わたしの語彙においては長く禁じ られているものでもあります。一つ事件を引きましょ う、湾岸戦争中に起こったもので、アメリカ軍のヘリ コプターのいわゆる誤爆によって、アメリカ軍の戦車 が破壊されたのです、最後には、徒歩で離れようとし ていた生き残りの二人の兵士も敵と間違えられ、ヘリ コプターの暗視カメラの前で殺されました。非常に心 動かされるエピソードであり、一般に公開されたヴィ デオでわたしは知りました. それは機械化された殺人 についての分析を、勝利という多幸症を、それから敗 北という破滅を描いています、このテープには《ザ・ ブラザーフッド》のコンセプト全体が、脱構築された かたちで含まれています。わたしはこれを《テーブル 3:フレンドリー・ファイア》のメインモチーフとし ました、しかしいつものことながら、テーブル作成に おいてのわたしの主要関心は、純粋にフォーマルなも のでした. このインスタレーションには複数のメディ アが使われています、映像を発生させるものとして、 スライド・プロジェクターとヴィデオ・プロジェクタ ーが付いています、その内外の空間を、6面の小スク リーンとテーブルを囲む5面の大スクリーンに表象し ます、イメージの統一体が、光学的に6方向に分割さ れているのです、そして最後に鑑賞者に対し、ドラ ム・パッドの形を取って、参加の要素が提供されます。 演奏すると、速度と方向のメッセージがレーザーディ スク・プレーヤーに送られるのです。いま見ると、作 成時にわたしがもっていた形式上の関心のほとんどす べてが、ここには手際よく表わされていると思えます。 映像を空間的コンテクストにおいて扱う. という関心 です、そして大きさ的な面で言うと、このテーブルは、 展示するのにかなり手頃なものとなっていますね.





## - - HUHTAMO/VASULKA

#### And this one?

This is *Table 3*, and it has been exhibited many times in different places, including Japan and the Czech Republic. In a way, this table is conceptually closest to The Brotherhood. It is a very conceptual work, it even has content as compared to the others. By now, I have accepted that content can be part of a work like this. But "content" is a loaded term, long forbidden from my vocabulary. Here I refer to an incident, which occurred during the Gulf War, when so-called friendly-fire from an American helicopter destroyed an American tank. In the final stage, two surviving soldiers walking away are mistaken for the enemy and killed in front of the helicopter's night-vision cameras. It is a very moving episode that I obtained on videotape, released to the public. It depicts the anatomy of mechanized killing, the euphoria of victory, and then the crash of defeat. The tape contains the whole deconstructed concept of The Brotherhood. I took that as a main motif of Table 3. But as always, my main interest in making the table was purely formal. This installation uses several media: it has a slide projector and a video projector as the source of the images. It has its representation of the inner space and outer space on the six small screens and five large ones surrounding the table. It has a unity of image, divided optically in six directions. And finally, it offers an element of participating to the visitor in the form of a drum pad that, when played, sends speed and direction messages to a laser disk player. Looking at it now, I see that it neatly presents almost all my formal interests at the time I made it—the treatment of images in the context of space. And physically, this table has become almost handy to exhibit.

いまおっしゃったこと、つまり、クリエ イターとしてのあなたは機械工だという ことを、もう少し詳しく説明していただ けますか、工学的なアプローチとあなた 自身のアプローチの違いを、あなたはど のように考えていらっしゃいますか.

主な違いは、わたしが文化的コードシ ステムを、すなわちテクスト、サウンド、 カメラ視点,物理的運動,コレオグラフ ィックなジェスチャー,インタラクティ ヴな戦略を、すべて統合し取り入れよう としている点にあります。わたしの仕事 は、ある体系から別の体系へと移る、観 念的で抽象的な移行に関わるものです. 工業的なニーズはこれとは別のものです が、やはりそうした領域へとゆっくりア プローチしています.実用的なものから 文化的なものへの移動は明らかです.し かし大部分において、工業的もしくは工 学的なアプローチは、基本的に、解決す べき明白な課題をもっています、わたし は何も解決してはいません. 通訳してい るのです、わたしはこうしたすべてを、 アートの次元の内部にある文化的産物と して見ようとしています. ですからわた しは, 自分の探究もしくは構築が, 工学 ではなくアートのほうに近いという関係 を好むのです、実際、わたしが生涯ずっ とやってきたことは、「アート」のレッ テルを貼られています、とはいえ、それ が真実だと主張する根拠を、わたしは特 別にもってはいません、わたしはアート という避難所が好きなのです、それは、 わたしが心底関心をもつことのできる唯 -のものなのです. →p68





# Would you elaborate on what you just said, that as a creator you are a machinist? How do you see the difference between an engineering approach and your own approach?

The major difference is that I am trying to integrate or include all cultural coding systems: text, sound, camera view, physical motion, choreographic gesture, the interactive strategies. My work is about ideal, abstract transformations from one code to another. Industrial needs are different, yet they slowly approach these areas as well. The move from the utilitarian to the cultural is evident. But for the most part, the industrial or engineering approach has a fundamentally defined task to solve. Here I am not solving anything, I am interpreting. I am trying to look at all this as a product of culture within the dimensions of art. So the proximity of my investigation or construction to art is the relation I prefer. In fact, what I have been doing all life has been labelled "art." I have no particular claim to that's being true, yet I do like the asylum of art. In my heart, that is the only thing I'm interested in.  $\rightarrow 68$ 





# インターメディアルC・・・ダーフィー

人間はまた,戦争の達人にもなった.温和な菜食主義者だったと伝えられるレオナルドでさえ,1世紀前に戦争用の機械の設計に多くの努力を傾けていた.最後には彼は,手仕事による自分の作品が拡大される夢に取り憑かれた.

空が新たに破壊され、そこから下りてくる火柱 が、舞い上がり、恐怖のうちに飛びさっていく かのように見えるであろう、あらゆる生物たち が人間の言葉を話すのを聞くだろう、人々はた ちまちばらばらに、運動のない世界に向かって 走りだすだろう、闇のただ中で、彼らは強烈に 輝く閃光を見るだろう、おお素晴らしき人類 よ! いかなる狂気がおまえをかくのごとくそ そのかしたのか!→p70

## Intermedial C . . DURFEE

Men also became masters of war. Even Leonardo, reputed to be a gentle vegetarian, had devoted much of his energy a century earlier to the design of war machinery. In the end, he was haunted by dreams of his handiwork extended:

It shall seem to men that they see new destructions in the sky, and the flames descending therefrom shall seem to have taken flight and to flee away in terror; they shall hear creatures of every kind speaking human language; they shall run in a moment, in person, to divers parts of the world without movement; amidst the darkness, they shall see the most radiant splendors. O marvel of mankind! What frenzy has thus impelled you!  $\rightarrow 71$